関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

北海道の農耕馬

著者	森 隆男
雑誌名	昔風と當世風
巻	88
ページ	32-35
発行年	2005-04-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1895

北海道の農耕馬

森　隆男

はじめに

北海道の馬といえば緑の草原で放牧されているサラブレッドを思い浮かべるが、かつて広い北海道の土地を耕した主役も馬であった。馬を利用した農具、とくに車馬鍬について調査をするため、江別市篠津地区を訪れた。車馬鍬の一種といえる鬼ハローが使用されていたが、作業中に馬が負傷する事故が多くあまり普及はしなかったという証言を得た。大事な馬が傷つく農具の使用は避けられたというのである。結果的に、人と馬の間で交わされてきた交流に調査の重点を置くことにした。

本稿では農耕における馬、そして馬のいる暮らしついて紹介したい。

一　馬耕農具

北海道の馬耕で用いられた主な農具は、洋式の犂プラウと砕土器ハローである。当地で農業に従事して三代目という徳永武俊氏（大正一三年生まれ）からの聞き書きを中心に、馬耕農具を紹介しよう。

プラウとハロー

徳永家は現在三〇町歩の耕地を所有し、八町歩を米作、五町歩を麦作、残りをキャベツなどの野菜の栽培に当てている。しかしかつてはほとんど水田で、昭和四二年ごろから減反政策に従い野菜作りに転換したという。昭和四〇年頃にトラクターが導入され始めるまでプラウで耕し、ハローで砕土と整地をした。農具の購入先は江別市である。農機具庫には先代から使用したプラウやハローのほか、馬具などが残されていた。

ここでは主にハローを取り上げてみよう。木枠は長さ一一五㎝、幅一二〇㎝で、中間で二つ折りにでき、使用時は板を入れて固定する。これは運搬と収納を容易にするための工夫である。枠組された桁木には鉄製の歯桿が三〇本取り付けられ、その太さは二㎝四方、長さ一六㎝である。木枠に付けた金具の一方を馬の引き綱に結び、もう一方の金具に結びつけた綱は人が持つ。それぞれの歯桿の跡が重ならないように斜めに牽引する。方向を転換したり、障害物に当たったときは、人が綱を引いてハローを持ち上げる。徳永家でハローを使用したのは畑だけで、プラウで土を起こした後、ゴロと呼ぶ土の塊を砕くために重宝した。

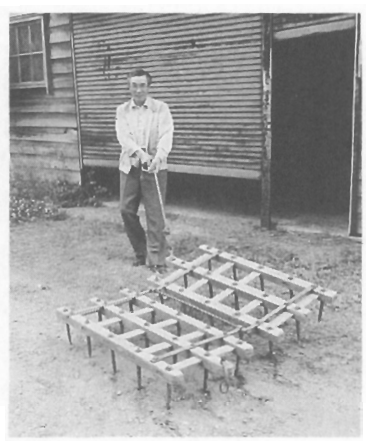

写真１　ハローの引き綱をもつ徳永氏
（手前の金具には、馬の引き綱を結ぶ）

なお正木勝夫氏（昭和三年生まれ）は水田で二頭引きのハローを使用した。二頭引きのハローになると幅が一・五倍になり、耕地を幅広くそして深く耕すことができる。また一頭引きは馬が肩をいためやすいので短時間しか使用できないが、二頭引きでは長時間の使用が可能になる。馬は経験豊かな馬と新しい馬を組み合わせる。経験豊かな馬がリーダーシップをとって、新しい馬にタイミングとこつを教えるからであるという。そのために二頭の轡（くつわ）の間隔を二尺程度に近づける。

鬼ハロー

鬼ハローが使用されたのは第二次世界大戦が終わるまでである。篠津地区の土質は粘土質で、乾燥すると硬くなりゴロができやすい。このゴロを砕く際に鬼ハローは大きな効果を上げた。しかし使用する人は少なかったという。鬼ハローは馬が暴れると事故が起きやすく、人馬ともに傷つくことが多い危険な農具だったからである。

江別市では実物の鬼ハローを見ることはできなかったが、北海道開拓記念館には数点収蔵されている。同館学芸員山際秀紀氏から提供していただいた写真によると、鬼ハローの前部に引き綱を固定して牽引させ、人が上面の板の上に立って手綱を操作する。形態と使用法は鳥取県のツチメギに似ている。雪解け時の水田で行なう作業であるが、冷たい田の中に入る必要がなく、人にとっては便利な農具であった。

なお車馬鍬が北海道に導入されなかったわけではない。北海道開拓記念館に数点収蔵されている。また函館市立博物館では展示中の車馬鍬を観察することができた。幅一〇一㎝、長さ八四㎝、高さ七二㎝で一八本の鉄製の歯桿を持ち、本州で見ることができる車馬鍬に比べてやや大型である。長期間にわたって使用されており、軸受け部分が摩滅して補修が加えられていた。同館学芸員の保科智治氏によると函館市では昭和四〇年代まで使用されていたという。

二　人と馬の暮らし

馬について語っていただいたのは正木勝夫氏（昭和六年生まれ）と萩原健氏（昭和七年生まれ）である。ここでは二人から聞き取りをした人と馬の暮らしについて記そう。

農耕馬

農耕馬として使用されたのは、重系種とペルシロン種の二種である。フランス原産のペルシロン種は体格が大きく、水田での作業には向かない。冬道も同様である。農耕馬としては重系種が適している。それでもペルシロン種の馬を飼うのは財産として心を満たすことができたからであるという。

一般的には二歳馬の雌を購入する。去勢馬は力は強いが扱いにくいという。四歳で種付けをして出産させ、一五歳ぐらいまで使役する。その後は博労に売ることになるが、気に入った馬の場合は二〇歳ぐらいまで飼うことがあった。このように長期間にわたり家族同様に暮らすため、人と馬との間に細やかな情が交わされることになる。

馬は神経質で、飼い主が変わるだけで体調を狂わす。また腸が弱く、腸ねん転を起こすことが多かった。そのときは江別市に居住していた三、四人の獣医師のうちの一人に往診を頼むことになる。馬の機嫌は目を見ればわかるという。馬が喜ぶと口をパクパクさせ、人に唇を寄せる。機嫌が悪いときは耳を後ろに寝かせる。首を軽くたたいたり、たてがみを撫ぜると落ち着く。

馬に農具をつなぎ作業を始めるときに掛ける声はヨシ、手綱を操作して止めるときに掛ける声はオーヨである。慣れた馬はカルチベーターで土を寄せるとき、作物を踏まずに進む。しかし女性など人の顔を見て嘗めてかかる馬もあり、思い通りに御すことができない場合もある。馬は人の心をつかむ動物で、処理をされるために賭場の近くまで来ると顔色が変わり、涙を流すともいう。

蹄鉄

前脚と後足では形が少し異なるが、ほぼ円形である。また農耕馬の蹄鉄は競走馬に比べて大型で、縦横とも一五・五㎝である。江別の町に蹄鉄屋が四軒あった。

出産

馬の出産は仕事をさせていると胎児が大きくならず、比較的安産である。脚から出産し、肩が出るとすぐに産まれる。夜の間に出産し、朝気づくこともある。出産後の母馬は一週間程度仕事を休ませる。仔馬が生まれると馬籍

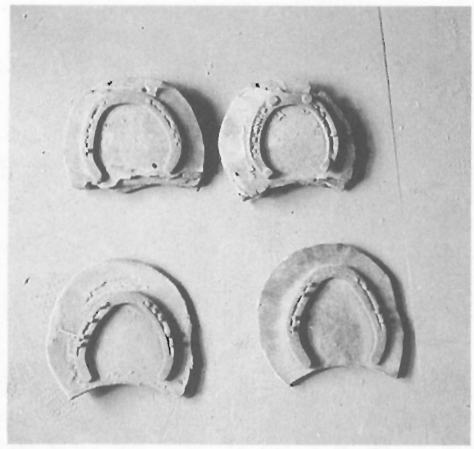

写真2　蹄鉄（上）前脚、（下）後脚

に記入するため役場に届ける。名前は「しば桜」など桜の一字を使うことが多いという。また仔馬を購入するときは前の持主がつけた名前を受け継ぐ場合が多い。

仔馬に対する母馬の愛情はきめ細やかである。出産後、母馬は仔馬の体中をなめてやる。母馬を外に連れ出すときは仔馬も一緒である。仔馬は母馬の後を付いて歩き、疲れると畑の中に座り込むが、その様子が可愛いという。

前出の徳永氏は悲しい思い出を持っている。出産後の1週間目の夜に、飼っていた母馬が突然死んでしまったのである。朝起きると仔馬が母馬の周りを回っており、時々乳首に吸いつく痛ましい姿が忘れられないという。死んだ馬の移動は大変で、馬車に積んで埋葬した。残された仔馬のために乳牛を飼い、乳を与えた。乳を搾る間、仔馬は徳永氏の後ろでじっと待っていたという。しかし馬乳ではないので、当歳の間は腹が異常に大きくなった。母馬を亡くした仔馬は人に従順で、結局、その馬を一五年間飼い続けることになった。

三　馬に寄せる思い

家族と同様に暮らしてきた馬の死は、飼い主にとってつらいことである。死んだ馬は家の近くに埋め、馬頭観音を刻んだ石碑を建てた。

合同で祀るところもある。萩原氏宅の敷地の一角には、昭和一七年九月に当時の篠津第四部落会が建立した石碑が残っている。「馬頭観世音」の文字が刻まれている。現在、この碑を祀る家は四戸になったが、四月四日に各家から米と小麦を少しずつ持ち寄り供物とし、江別神社の宮司に祝詞をあげてもらっている。

写真3　萩原氏宅の敷地の一角に建立された「馬頭観世音」の碑

二十戸の道路わきには「馬頭観世音」、「牛馬観世音」と刻んだ二基の石碑が建てられている。前者は大正九年名越氏によって建立されたものである。また後者には牛と馬の頭部が浮き彫りにされている。

中島の道路わきにも「畜護神之祀」と刻ま

写真4　畑が見える楡の木の下に建てられた馬の供養碑

れた石碑が見られる。昭和一〇年の建立で、現在付近の人たちによって毎年九月に例祭が営まれている。この碑から少し離れた畑の一角に楡の大樹が立ち、その下にも「畜護神」と刻まれた石碑がある。昭和四二年の年号が認められるこの碑には、愛馬にはともに働いた畑の見える場所で眠って欲しいと願う飼い主の心を読み取ることができる。今まで集落から離れたところに家畜墓を見てきた私には、比較的身近な場所に死んだ馬が埋葬され供養の石碑が建立された風景は意外だった。あらためて厳しい耕作条件のこの地で、人と馬が心を通わせながら生きてきた暮らしを思った。

「北海道開拓の村」前職員の関秀志氏には、北海道の農具について貴重な文献を提供していただいた。心よりお礼を申し上げたい。

（奈良市大安寺一―十一―二十八）